

一晩だけの禁断の恋のはずが
憧れの御曹司に溺愛されてます

冬野まゆ

Mayu Touno



Eternity
BUNKO

目次

一晩だけの禁断の恋のはずが
憧れの御曹司に溺愛されてます

書き下ろし番外編

今宵も月が綺麗です

一晚だけの禁断の恋のはずが

憧れの御曹司に溺愛されてます

プロローグ 黄昏時の出会い

「小日向、出かけるのか？」

十一月の午後、自身が勤める建築設計を担う神田デザイン^{かんた}のオフィスで、レザールのトールバッグに資料を詰めていた小日向莉子は、そう声をかけられ顔を上げた。

見ると先輩社員の雨宮和也^{あみやま}が、デスクチェアに背中を預けてこちらを見ている。

所長をはじめ、うるさい先輩社員がいらないのをいいことに、仕事をサボっているらしい。怠^{だる}そうにこちらに顔を向ける雨宮のやる気のなさに、莉子は内心眉をひそめる。

「新規リフォームの打ち合わせです。その帰りに、今回のコンペの現地視察に行つてきます」

雨宮の態度に思うところはあっても、相手は先輩だ。感情を抑えて話す莉子に、雨宮がチツと舌を鳴らす。

「次回のコンペって、あれだろ？ K S デザイン^{ケーエス}も参加するやつ。そんなのまた加賀弘樹^{かがひろ}が、加賀設計のご威光で受注を取るんだから、現地視察なんて時間の無駄だ」

雨宮が他人の仕事にケチをつけるのは、今に始まったことではない。

なんだかんだと言いつつ努力を放棄するだけでなく、頑張っている他の社員のやる気を削ぐ^そようなことを言ってくる。

以前、そんな彼の態度をやりわりと正したところ、その後、かなりの嫌がらせを受ける羽目になった。そのため最近、彼の発言は聞き流すことにしている。けれど、湧き上がる不快感までは抑えられない。

「そうですね。でも、今後の勉強のために視察はしておきます」

無表情でそう返してオフィスを出ていく莉子の背中に、雨宮の聞こえがしな声^{こえ}が飛ぶ。

「アイツ、ホント可愛げがないよな。女として、マジ終わってる」

コンプライアンス教育の参考事例として、そのまま利用できそうなハラスメント発言だが、わざわざ相手にする時間が勿体^{もったい}ない。

莉子は聞こえなかったフリをして、オフィスを出た。

予定どおりリフォームの打ち合わせを終えた莉子は、その足で老朽化の進んだ商業施設を訪れた。

昔は地域の生活を支えていたその商業施設は、近くに新たな大型複合施設ができたこ

とで、今年役目を終える。

跡地には、大手企業が経営母体の飲食店が建つ予定になっており、そのテナント設計は複数の設計事務所が参加するコンペで決められることになっていた。

莉子が勤める神田デザインも、コンペに参加する予定だ。すでに下見は終えて、ある程度の草案はできているのだけど、よりよいものにするために再度現地を見に来たのだった。

冬の夕暮れは早い。

まだ午後五時前なのに、僅かに夕日の名残を残した濃い藍色の空には宵の明星が輝いている。

寒い中デジカメを片手に周囲を散策していると、不意に脳裏に雨宮の言葉が蘇る。

『そんなのまた加賀弘樹が……』

彼の意見を肯定するつもりはないけど、そう言いたくなる気持ちが少しだけわかる。

雨宮の言う『加賀弘樹』とは、KSデザインの社長のことだ。

神田デザインとは事業規模や得意分野が似ているためか、コンペで競うことが多く、最終候補で顔を合わせることが度々ある。しかし悔しいことに、選ばれるのは高確率でKSデザインの方だった。

神田デザインが勝った数少ない案件は、どれも所長の神田が率先して手掛けたもので、

莉子や雨宮が任されたものは全てKSデザインに負けていた。

その原因はもちろん、自分たちの力不足にある。

だから莉子は、雨宮のように、どうせ負けるのだからと最初から試合を放棄するのはなく、今できる努力を精一杯して臨みたい。

そしていつかは、加賀弘樹を喰らせるような企画を提案して勝利を勝ち取ってみせる。そうでなくては、若手育成のためにコンペに参加させてくれている神田所長に失礼だ。特に今回のコンペは、莉子や雨宮といった若手に全件を委ねてくれているので、いつも以上に気合が入る。

—— 今度こそ、ウチが勝つ！

そう自分を鼓舞して、莉子は宵闇に沈む街並みへレンズを向けた。

—— バッグ、邪魔かも……

撮りたいアングルに合わせてカメラを構えると、資料の詰まったバッグが肩から落ちてきてバランスが取りにくい。

かといって地面に置くのも嫌で、カメラを構える度に肩からずり落ちてくるバッグに悪戦苦闘していると、不意にそれが軽くなった。

「え？ —— つ！」

驚いて振り向いた莉子は、背後に立つ人の姿に息を呑んだ。

——どうして彼がここに……

「神田デザインさんの子だよ。写真撮る間、バッグを持つてるよ」

そう言って、にっこり微笑みかけてくるのは、先ほど静かな対抗心を燃やしていたK Sデザイン社長の加賀弘樹、その人だった。

弘樹は、莉子のバッグの持ち手を握って軽く浮かせてくれている。

「君も視察？ 俺もだよ」

彼は人好きのする笑みを浮かべて言う。そして莉子の肩から、スルリとバッグを取り上げると自分の肩にかけた。

そしてキョトンとしている莉子に、写真を撮るように顎の動きで促す。

「あの……」

「黄昏時のこの感じ、いいよな。万人の郷愁を誘う風情がある」

こちらの戸惑いなど眼中にない感じで、弘樹は莉子がレンズを向けていた方角へ視線を動かす。

彼方へ目をやる彼の表情は穏やかで、ただそこにいるだけで映画のワンシーンのように様になる。

それにつられて莉子もそちらに視線を向けると、柔らかな闇に浮かぶ住宅の灯りが広がっていた。夕暮れから夜へ向かう景色は、彼の言葉どおり不思議とどこか懐かしい。

生まれ育った街でもないし、故郷に似ているわけでもない。それなのに、次第に暗くなる景色に浮かび上がる街灯や家々の灯りは、不思議なほど郷愁を誘う。

「冬の夕暮れは早いよ」

景色に見惚れていると、弘樹にポンッと背中を押された。

それで本来の目的を思い出した莉子は、シャッターチャンスを優先することに決めた。弘樹にバッグを預けたことで身軽になった莉子は、そのまま景色に意識を集中させていく。

街並み、建設予定地、近くの街路樹、資料として残しておきたい風景を、様々な角度から写真に収めていると、ファインダーの中に弘樹の姿が飛び込んできた。

莉子のバッグを肩にかけ、細身のスーツの上にダウンジャケットを羽織った彼は、ポケットに両手を突っ込み、モデルのような佇まいで遠くに視線を向けている。

弘樹は自分にレンズが向いていることに気付くと、白い息を吐いてクシャリと人懐っこい笑みを浮かべた。ついといった感じで、わざわざポケットから左手を出してピースサインまでつけてくれる。

コシのある黒髪を適当に遊ばせている彼は、形のよい二重で目力が強い。年齢より若く見えるが、背が高く甘さを含んだビターチョコを連想させる大人の男の魅力に溢れている。

そんな彼に視線を向けられ、莉子は思わずシャッターを切ってしまった。

「す、すみません！ 後できちんと消しておきますので」

「ああ、ごめん。データ^{データ}の無駄使いをさせたね。消しておいて」

莉子の言葉を違った意味に捉えた弘樹が、申し訳なさそうに言う。

莉子としては、彼の社会的地位を考えての発言だったのだが、本人はそういうことは気にしていないらしかった。

加賀弘樹——年齢は確か、二十七歳の莉子より八歳年上の三十五歳。学生時代から海外の有名な賞を受賞し、将来有望な若手建築家としてその名を響かせていた。その上、今は加賀設計という大手設計事務所の子会社であるKSデザインの社長を務めている。若く才能に溢れたイケメン社長——それだけでも十分なモチ要素であるが、彼は加賀設計の創業家直系であり現社長の孫ときている。

社長が元氣なうちは、子会社であるKSデザインで自由に腕を振るうと共に、経営に必要なノウハウを学んでいるのだとか。

これまでは、なんとなく自分とは違う特別な存在のように思っていたので、彼の気さくな態度を意外に思った。

——加賀さんって、こういう人なんだ……

そこで、ずっと彼にバッグを持たせたままでもいたことを思い出し、莉子は慌てて手を

差し出す。

「バッグ、ありがとうございます」

「この後、まだこの辺を見て回るのか？ もし帰るなら、軽くどうだ？」

莉子のバッグを返すことなく、弘樹は手の動きで飲みに誘ってきた。

そんな滅相もないと、莉子は首と手を振る。

「残念ですけど、今から会社に戻らないといけないので」

莉子が当たり障りのない断りの言葉を口にする、弘樹は残念といった感じで肩をすくめる。

でも別に、本気で残念がっている雰囲気ではなさそうだ。

その反応も含めて、社交辞令のようなものだろう。

「それなら、車で事務所まで送ろう」

腕時計で時刻を確認して弘樹が言う。

その申し出に、それこそんでもないと、莉子は激しく首を横に振った。

莉子の反応を見た弘樹は、それならばと、すぐに別の提案をしてくる。

「じゃあ、暗くなって危ないから駅まで送るよ」

弘樹はそう言う、莉子の返答を待つことなく歩き出した。

「あ、バッグ……」

「重たいから駅まで持つよ」

手を差し出して背中を追いかける莉子に、弘樹が言う。

そんなわけにはいかないと、莉子は頑張って早足で彼を追いつき、その前に立ちはだかる。

「そんなの、悪いです」

肩で息をする莉子がそう眉尻を下げると、弘樹も負けじと眉尻を下げて困り顔を見せた。

「俺としては、自分より明らかに小柄な女性に荷物を持たせて歩かせる方が、心苦しくて困るんだけど」

「……っ」

仕事の兼ね合いで時折見かける彼は、経営者として隙のない精悍な表情をしていることが多い。だからこんな人間味に溢れた表情を見せられると、自分の方が悪いことを言ったような気分になってしまう。

「だから、これは俺が持つよ」

「あっ！」

彼の表情にひるんだ隙に、弘樹は莉子の頭をクシヤリと撫でて再び歩き出す。チラリとこちらを振り返った弘樹は、どこか得意げだ。

どうやらさっきの表情も、彼の作戦だったらしい。

「……」

なんだか彼にしてやられた気分になりつつ、莉子はその背中を追いかけた。

並んで歩いてすぐに、自分を駅まで送らなければ済む話ではないかと気付いたが、提案したところで言い負かされそうな気がするのでやめておく。

—— なんだか、加賀さんには勝てる気がしない。

それは、この小競り合いのことを言っているわけではなく、人生の全てにおいて、加賀弘樹という人に勝てる気がしなかった。

雨宮はコンペで神田デザインが加賀弘樹に勝てないのは加賀設計のご威光だと主張していたが、そうでないことは彼の手掛けた仕事を見れば一目瞭然だ。

—— 加賀さんのデザインは、とにかくいい。

きつと彼は可能な限りヒヤリングを繰り返して、今日のように、こまめに現地に足を運んで、周囲の環境やその場の空気を直接肌で感じてプランを立てているのだろう。

まだまだ新米の域を出ない莉子でも、彼の企画を見れば、それを察することができたおまけに、こうして直接弘樹の人柄に触れたことで、彼の魅力は企画力に限ったものではないと実感する。

弘樹には気取ったところがなく、年下の莉子にも自然体で接してくれる。

彼は人の心を引き付ける魅力に溢れていて、ライバル会社の莉子でさえ「この人と一緒に仕事ができたら楽しいだろうな」などと考えてしまうくらいだ。

これが、世に言うカリスマ性というもののなのかもしれない。

——そういえば加賀さん、どうして私のことを知っていたんだろう？

莉子にとって弘樹は、尊敬に近い憧れの感情を抱く相手だけど、その感情は一方的なものだ。

コンペで顔を合わせることはあっても、まさか自分の存在を認識されていたとは思わなかった。

「どうかした？」

忙しなく思考を巡らせていた莉子に、隣を歩く弘樹が不思議そうな顔を向ける。

いつの間に夕日の名残も消え、すっかり暗くなった空には白い月が浮かんでいた。完全に日が沈み、下がった気温のせいか吐く息が白い。

街灯に溶けていくそれを見るときもなしに見ていた莉子は、ふと彼の左手の薬指で鈍く輝くものに気付いた。

手袋をしていない彼の左手の薬指には、銀色の指輪が嵌まっている。

「ご結婚、されているんですね」

莉子が左手に視線を向けて言うのと、弘樹も自分の指に視線を向ける。

一度指輪を確認した弘樹は、莉子に向かってはにかむような笑顔を見せた。

「正式に……というわけじゃないけどね」

そこで、弘樹が国際結婚をしていて、海外で暮らす妻とは別居状態にあるらしいといった噂を耳にした記憶が蘇る。

——国際結婚だと、色々難しいのかな？

なんにせよ、正式ではなくても、彼は既婚者ということだ。

こんな大人の色気に溢れたイケメン御曹司が、もし独身だったとしたら、きっと周囲の女性が放っておかないだろう。

彼を射止めた女性は、さぞや素敵な女性に違いない。

連想ゲームのように次から次へと出てくる考えに、莉子はそつと笑う。

「どうかしたか？」

控えめな微笑みに、目ざとく気付いた弘樹が尋ねる。

その声には、とても自然な親しみが込められていて、二人の間にも話しやすい空気が生まれる。だから莉子は、素直に今感じていることを口にした。

「なんだか加賀さんが、人間、人間していてホツとしました」

「人間、人間……？」

少しキョトンとした表情を浮かべる弘樹もまた、莉子の心を和ませる。

「建築家としての加賀さんは、私なんかとはまったく違う特別な存在のように感じています。ですけどこうやって話してみると、普通の人なんだなって感じて安心しました」
 軽やかな足取りで彼を追い抜かした莉子は、くるりとを返して弘樹を見上げる。
 「加賀さんの設計が素敵なのは、加賀さんが浮世離れた特別な存在だからじゃないって、実感していたところです」

「そりゃそうだろ。普通の人が普通に利用する場所を提案するんだから、その視線がなきゃ、いい図面は描けないよ」

それを聞いた莉子は、一度背後を振り仰ぎ、空に浮かぶ月を見上げてから小さく握り拳を作って続けた。

「それなら、努力すれば私も、いつか加賀さんに追いつけるってことですよね」
 もちろんそれは、並大抵の努力ではないだろう。

それでも雨宮のように、最初から勝てるはずがないと努力を放棄するよりずっといい。やる気に満ちた表情でそう話す莉子に、弘樹は一瞬、目を見開く。でもすぐに、その目を優しく細めた。

「ああ。そうだな」

そんなことを話している間に、駅に到着した。

「バッグ、ありがとうございます」

莉子の手を差し出すと、弘樹は肩にかけていたレザーバッグを外した。

それを莉子に差し出しながら言う。

「今度また、食事に誘ってもいいか？」

「……？」

動きを止めた莉子が「なんのために？」と視線で問いかけると、弘樹が困ったように笑う。

「同業者として、若手の意見を聞いてみたい」

——この誘いは、社交辞令かな？

もしかしたら、本当にそう思ってくれてのことかもしれないけれど、彼のような人が自分の意見を聞いて得るものなどあるのだろうか。

もっと話してみたいという気持ちはあるけれど、的外れな発言しかできなかった場合、忙しい彼の貴重な時間を無駄にさせることになる。それはさすがに申し訳ない。

とりあえず社交辞令には、社交辞令を返しておくのが無難だろう。

「機会があれば是非」

「じゃあ、次の機会を楽しみにしているよ」

お互いそのない笑顔で挨拶をして、莉子は弘樹と別れた。

改札を抜けてホームに続く階段を上る前に振り返ると、見送っていた弘樹が律儀に小

さく手を振ってくれた。

年上相手に失礼ではあるが、その姿をなんだか可愛く思う。女としての可愛げゼロの自分と、既婚者でイケメン御曹司——それも、自分が同業者として尊敬している相手だ。そんな二人に、この先なにか起きるとは思わないけれど、彼を見ると不思議と心がくすぐつたくなる。

そつと小さく手を振り返した莉子は、弾む足取りで階段を上っていった。

1 王子様との再会

年が明けた一月。神田デザインとKSデザインが共に参加した件のコンペティションは、大方の予想どおりKSデザインの案が採用されて終わった。

その結果に、雨宮は憤懣^{ふんまん}やるかたない様子で「できレースだ」と騒いでいたが、莉子は当然の結果として受け止めている。

神田デザインのプランは、外観を雨宮、内装を莉子が主導して制作してきたが、雨宮は新規参入の飲食店の存在感を強く主張するような外観を提案していた。

それに対し、KSデザインが提案した図面は、地域の景観に不思議と馴染むものだった。

どちらも老朽化した商業施設の面影^{おもかげ}を残すことなく新しく作り替えているのに、描かれたプランは正反對のものになっていた。

たとえて言うのであれば、雨宮が描いた図面は、穏やかな川の流れに石を投げ込んだようなインパクトがあるのに対し、弘樹が描いた図面は、川に笹舟を浮かべてその流れに沿っていく姿を連想させた。内装もまたしかりである。

——加賀さんのデザインは、やっぱりいい。

今回のKSデザインの図面を見て、莉子は再度そう認識した。

十一月の黄昏時、偶然遭遇した弘樹と自分は同じ景色を見ていたはずなのに、彼に見えていて自分に見えていなかったものはなんだったのだろうか。

あの日、弘樹は「普通の人が普通に利用する場所を提案する」と話していた。当たり前で簡単なことだけど、それをうまく表現するのは難しい。

——もし加賀さんの目を通して世界を見ることができたら、今見えている景色はどんなふうになるだろう。

そんな疑問を素直に言葉にして所長の神田に投げかけたところ、神田から「直接本人と話してみれば、そのヒントが見えてくるかもよ」と返してくれた。そして、同業者が多く参加する、賀詞交換会^{がし}に自分の代役として出席してはどうかと勧めてくれたのだ。

そのありがたい申し出に飛びついた莉子は、一月某日、都内の老舗ホテルのパーティー

ルームを訪れていた。

「すごい人……」

立食形式の賀詞交換会に参加している顔ぶれを眺め、莉子は静かに唸った。

参加者は全体的に年配者が多く、男女問わず上品で洒落た装いようばいをしている。それだけでも気後れするのに、参加者の中には業界紙でよく見かける顔もあるので、より一層緊張してしまう。

軽い気持ちで参加したが、かなり場違いなところに紛れ込んだような気がして仕方がない。

莉子がいつものシンプルなパンツスーツで来たことを後悔していると、大きな手に肩を叩かれた。

「神田デザインの子、また会ったね」

ポンッと軽く触れる手の感触と共に、低く甘い男性の声が聞こえる。

心地よいバリトンに、相手が誰であるかを察して視線を向けると、思ったとおりの人が立っていた。

「加賀さん、お久しぶりです」

今日の弘樹は、洒落っ気のあるデザインの三つ揃いのスーツを品良く着こなしている。甘さを含んだ端整な顔立ちも相まって、まるでファッション誌から抜け出してきたモ

デルのようだ。そんな彼の佇まいに一瞬見惚れてしまう。

でもすぐに神田の名代としてこの場に参加させてもらっていることを思い出し、莉子は丁寧に頭を下げて、弘樹と形式的な新年の挨拶を交わした。

「今日、神田さんは？」

「所長は別件で地方に赴おもむいており、本日は私が……」

顔を熱くしながら必死に言葉を紡つむぐ莉子の姿に、弘樹が柔らかな表情を浮かべて言う。
「俺相手に、そんなにかしこまらなくてもいいよ」

「……」

そんなことを言われても、莉子としては、相手が弘樹だからこそ余計に緊張してしまうのだ。

どうしたものかと難しい顔をしている莉子に気付き、弘樹が話題を変えた。

「神田さんから聞いたけど、この間のコンペの内装は、小日向さんが担当していたんだってね。あれよかったよ」

「えっ！」

弘樹に褒められたことにも、彼が自分の名前を知っていたことにも驚いた。

キョトンとする莉子に、弘樹もキョトンとした表情を返す。

「加賀さん、私の名前をご存じだったんですね」

驚きのあまり、莉子が思ったことをそのまま言葉にすると、彼は口元を押さえて笑う。「そりゃ、コンペで何度も顔を合わせているし、名刺交換もしているから知ってるよ。それに神田さんが君のことをよく褒めているからね」

「そう……なんですか」

口調から察するに、弘樹と神田にはそこその交流があるらしい。

今年還暦の神田は、普段は甘い物好きの好々爺こうこうやといった印象が強いが、過去には建築業界の名だたる賞を受賞している実力者だ。

そんな神田が自分を褒めてくれているというのは素直に嬉しい。

くすぐったい感情を持って余っていた莉子は、今さらながらに自分が肝心なことを言っていないかったことを思い出す。

「あの、今回のコンペ、おめでとうございます。KSデザインさんのプランは本当に素敵で、勉強になりました」

莉子は、一度背筋を伸ばして頭を下げる。

「ありがとう。君にそう言ってもらえるのは、嬉しいよ」

自分に向けられた賛辞を真っ直ぐに受け止めた弘樹は、綺麗な二重の目を不意にすつと細めた。

そんな何気ない仕草も、彼がするとやけに色気があるので困る。

「加賀さんのデザインは、本当にすごいです。はつきり自己主張をしているわけじゃないのに、一見ただけで加賀さんの仕事だってわかる存在感があります」

頬が熱くなるのを誤魔化すように早口で言う。

今回のコンペで、改めて弘樹のすごさを感じた。

だけど同業者として、ただ感動して尊敬して終わるつもりはない。

「あの日、同じ景色を見た加賀さんに見えていたものが、私の目には見えていなかったのは、ちょっと悔しいですけど」

そう付け足した莉子に、弘樹は自分の顎のラインを長い指で撫でる。

「それは俺の台詞だ。神田デザインさんの内装、曲線をうまく使ったデザインと優しい色味がよかったよ。『立ち寄る場所』って感じじゃなくて『帰りたくなる場所』って感じがして。ウチが勝てたのは、神田デザインさんの案の外観と内装のバランスが悪かったからだと思う」

「え？」

思いがけない言葉に莉子が目を瞬かせるまたた、弘樹が確信に満ちた口調で言う。

「俺が思うに、内装は君、外観は他の誰かが担当したんじゃないかな？」

「……」

言い当てられたことに驚く顔を、弘樹は興味津々きようみんしんといった表情で覗き込む。

「俺の方こそ、君の目に世界がどんなふう映っているか気になるよ」

無意識に莉子が背中を仰け反らせると、弘樹はその分腰を屈めて距離を詰めてきた。

——近い……

遠慮のない距離の詰め方に戸惑ってしまう。

弘樹はそんな莉子の耳元に顔を寄せて囁いた。

「特別な日にだけ行くことにしている店があつて、そこに君を連れていきたいんだが、誘ってもいいかい？」

悪戯の共犯者を誘うような口調で、弘樹は世界的に名が知られている高級ホテル内のバーの名前を口にする。

その店の名前なら、莉子も知っていた。

件のバーは、近代建築の巨匠として建築学の教科書にも載るような著名な建築家が手掛けた作品の一部を利用しており、当時のモダンなデザインを肌で感じることができらしい。

莉子も以前からチャンスがあれば一度は訪れてみたいと思っている場所なので、心が揺れる。

しかし、高級ホテルのバーに、憧れの人と二人だけでというシチュエーションに躊躇してしまふ。

なにより弘樹の瞳の奥に、雄としての情熱が揺らめいているように感じるのは気のせいだろうか。

恋愛経験が豊富なわけではないけど、そういった男女の機微を感じ取れるくらいには恋愛をしてきたつもりだ。そうは思うのだけど、彼ほどの男性が自分にそんな感情を寄せるはずもないので、きっとそれは錯覚なのだろう。

なんにせよ思いがけないシチュエーションに、行きたい気持ちはあつても腰が引けてしまふ。

「えっと、今日はこの後ちよつと約束があつて……」

しどろもどろになりながら、咄嗟に断りの言葉を口にする。

そんな莉子に、弘樹はニツと笑う。

「それは残念。じゃあ、他の日なら誘って構わないか？ 俺としては、君ともっと色々な話がしてみたいんだが」

そう話す彼の表情は、逃げ腰になっている莉子の反応を楽しんでいるようにも見える。逃げられると追いかけたくなるのは、生き物の本能なのだろうか。

だとしたら、追いかけられるとさらに逃げたくなってしまうのも、また生き物の本能だ。「か……加賀さん、結婚されていますし、二人つきりというのは……」

どうにか絞り出した莉子の言葉に、弘樹は一瞬自分の左手に視線を落として、困った

ように頭を搔く。

「妻の存在は、気にしなくていいよ」

どういう意味だろう。

——夫婦仲がうまくいっていないのかな？

もしくは彼の奥さんは、夫が同業者の女性と飲みに行くくらい気にしないのだろうか。だとしたら、ホテルのバーに誘われたくらいで警戒心を働かせる莉子の方が考えすぎなのかもしれない。

あれこれ考えて黙り込む莉子の表情を見て、弘樹はいよいよ困ったという顔をした。

「悪い。変な意味じゃなくて、いつも君が美味いって言っているチョコレートボンボンをそのバーでも扱っているから、上質な酒と一緒に味わう楽しさを教えたかっただけなんだ」

「へ………？」

思考が迷走しかけていたタイミングで告げられた不意打ちの台詞に、莉子は間の抜けた声を漏らす。

——チョコレートボンボン？

彼がなにを言っているのかわからない。

弘樹は戸惑う莉子の顔をまじまじと覗き込んだ後で「クッ」と喉を鳴らした。

そのまま口元を押さえてひとしきり笑った彼は、状況を呑み込めずにいる莉子に理由を説明してくれた。

「失礼。前に神田さんと仕事で一緒になった時に、そのホテルで扱っているチョコレートボンボンを手土産にしたら、『事務所の女性社員がすぐ気に入って、また食べたいって言っていた』と話していたから、それ以降、神田さんと会う時は必ずそれを手土産にすることにしていたんだが……」

「ああ……」

神田デザイン社の社員は十人。そのうち女性社員は莉子を含めて二人いるが、そこまで聞けば莉子にも状況が理解できた。

穏やかで人のいい神田は、尊敬できる建築家でもある。そんな彼の唯一の欠点を挙げるとすれば、無類の甘い物好きで、それに関してだけは少々遠慮がないことだろう。

「たぶん、所長が一人で食べていたんだと思います」

莉子の言葉に、弘樹も「だろうな」と同意してまた笑う。

「自分でも買えるだろうに、なんでそんな嘘をつくんだか」

弘樹が神田に渡していたチョコは、世界的にも有名な高級ホテルの名を背負うに相応しい味とそれに見合った価格をしている。とはいえ、社員十人を抱えて収益を上げている神田が買えない品ではない。

弘樹は理解ができないと呆れているけど、莉子にはその理由がわかってる。

「所長曰く『お菓子は、人にプレセントされると美味しさが増す』そうです」

職場で莉子たちがおやつを食べていると、神田はよく物欲しそうな眼差しを向けてくる。その視線に負けてお菓子をおすそ分けすると、すごく美味しそうに食べるのだ。

莉子のその話に、弘樹は目尻に涙を浮かべて笑った。

「神田さん、建築家としても人としても尊敬できる人なのに、時々大人げないな」

「あ、でも所長からお菓子を貰うこともありますよ」

神田所長の名譽のため、そう付け加えておく。

普段は『美味しいものは分け合ってこそ美味しい』と話す神田が独り占めしていたということは、弘樹が手土産にしていたそのチョコはよほど美味しいのだろう。

そんなことを話して笑い合う。そこでふと、莉子はいつの間にか自分がかなりリラックスして話していることに気が付いた。

肩の力を抜いて改めて弘樹を見ると、その視線を受け止めた彼が表情を綻ばせる。

実年齢より若く見える彼の表情は、爽やかな初夏の風を連想させる。

その自然な微笑みに、一人の男性としての温もりを感じた。

「……」

さっきまでとは違う熱が、莉子の頬を熱くする。

突然胸の奥から湧き上がってきた甘い熱を持て余していると、誰かが弘樹の名前を呼んだ。

声のした方に視線を向けた弘樹は、相手の顔を確認すると、表情を引き締めて軽く手を上げる。

「どうやら、気の抜けない相手らしい。」

「お引き止めして申し訳ありませんでした」

「こちらこそ、話せて楽しかった」

弘樹の表情の変化につられるように、莉子も表情を引き締めて頭を下げる。

神田の話題で、つい気さくに笑い合ってしまったけど、相手はこの業界の王子様なのだ。かしこまった莉子の態度に、弘樹は少し残念そうに肩をすくめて言う。

「今度から、ちゃんと小日向さんの口にもチョコが届くようにしておくから、是非食べてみて。それでも美味しいと思ったら、その時はまた飲みに誘わせてくれ」

そう言ってその場を離れていった弘樹だが、途中で思い出したようにこちらを振り返った。そして「君とゆっくり話してみたいのは本当だから」と付け足す。

その瞬間だけ、彼の表情は、さっきの爽やかな初夏の風を連想させるものに戻っていた。クルクル変わる彼の表情に、莉子の頬がまた熱くなる。

それに先ほどの会話から考えると、こちらが一方的に存在を認識しているだけだと

思っていた弘樹が、以前から自分の存在を認識してくれていたということになる。彼の見る景色に、自分が存在している。そんな些細なことが、すごく嬉しい。

——コラッ！ 既婚者相手に、舞い上がるなっ！

心の中でそう自分を叱咤しても、込み上げてくる熱を抑えることができない。

これ以上その熱が大きくなならないよう、莉子は知人らしき相手と話す弘樹の左手の薬指に目を凝らした。



「小日向君、ちょっといい？」

賀詞交換会で弘樹と言葉を交わした翌週、オフィスで仕事をしていた莉子は、自分の名前を呼ぶ声に顔を上げた。

視線を巡らせると、所長室から顔を覗かせた神田が手招きしている。

「はい。今行きます」

所長室に呼ばれる理由が思いつかないまま、莉子は席を立った。

特にミスをした覚えがなくとも、所長室に呼び出されるのは妙に緊張してしまう。

神田は無類の甘党ではあるが、細身でその分皺が目立つ。そんな彼が自分のデスクで

腕組みをして、厳しい顔をしていたらなおのことだ。

「これ」

腕組みを解いた神田が、入室した莉子に向かってデスクの上の箱を押し出す。

スマートフォンを二つ並べたくらい大きさの箱は、黒地の包装紙に包まれ、金色のリボンでラッピングされている。包装紙に小さく印刷された有名ホテルの名前を見て、

莉子はその箱の中身と送り主を察した。

「僕がチョコを横領していること、加賀君にチクッたでしょ」

莉子が察したタイミングを見計らって、神田がジロリと睨んでくる。

ただしその口調と睨み方で、それは彼流の冗談なのだとわかった。

「すみません。会話の流れで、そうなってしまうって……」

その流れを詳しく話すと、彼に飲み込まれたことにも触れなくてはならないので、曖昧に笑って誤魔化しておく。

神田は、ばつの悪そうな顔で言う。

「これからは、手土産を二箱用意するから、ちゃんと小日向君にも食べさせてやってくれと言われたよ」

だから遠慮なくどうぞと箱を押し出してくる神田は、それを手に取る莉子に「だからこれは、二人の秘密にしておこうね」と笑う。

どうやら神田はこれからも、自分の分のチョコは独り占めするつもりらしい。

「私まで、独り占めしてもいいんでしょうか？」

神田はともかく、自分まで貰っていいのだろうかと思っていると、その背中を押すように神田が言う。

「たぶん加賀君は、小日向君に食べてほしくて僕にチョコを預けているんだと思うよ」

「加賀さんが、どうして私に？」

戸惑いを隠せない莉子に、神田はこともなげに返す。

「ああそれは、君の言葉が加賀君を救ったことがあるからだよ」

「……えっ？」

まったく身に覚えのない話に、ただただ驚いてしまう。

話が呑み込めないでいる莉子に、神田は応接用のソファに座るよう勧めると、自分もそちらに移動する。

ローテーブルを挟んで莉子と向き合った神田は、膝の上で両手を組み合わせて話し出した。

「半年くらい前にも、コンペでウチがKSデザインに競り負けたことがあったのを覚えているかな？」

「はい」

その言葉に、莉子は頷く。

半年前に開催された個人美術館の改装工事のコンペで、神田デザインはKSデザインに競り負けた。

長年茶道をたしなんだという館長の所蔵する品の多くは楽焼らくやきの茶碗。千利休の茶の心を受け継ぐそれらの茶器は、素朴な佇まいで色彩的な絢爛けんらんさはないが、匠たくみの腕を感じさせる存在感があった。

KSデザインは、茶の道に通じる日本のわびさびを感じられるよう、敢えて余白のよな空間を幾つも設けて、季節の花々や掛け軸を飾りやすい配慮がされていた。

それに対して雨宮のデザインは、地味な展示物を内装の華やかさで補ってやろうといった気負いがあり、かえって楽焼きのよさを損なうものになっていたので、敗北は当然の結果といえる。

「あの時、雨宮君がかなり荒れて、『KSデザインの企画ばかり通るのは、社長が加賀設計の御曹司だからだ』『こんなできレースに参加するだけ無駄だ』って、帰ってきてから不満をまき散らしていたことを覚えているかい？」

「はい」

雨宮は、企画にかなりの自信を持っていたようで、他のスタッフの意見を受け入れることなくほぼ独断で企画を仕上げた。それが競り負けたことで、ひどくプライドが傷付

いたのだろうけど、彼は的外れな恨み言を延々と垂れ流していた。

雨宮の恨み言は偏見に満ちていて聞くに堪えないものだった。

「あの時、小日向君が雨宮君に『本当に勝ちたいのなら、勝てなかった言い訳ばかりしないで、勝てる方法を探せ』『加賀さんのプランには、いつもその努力を感じる』って叱咤したって話を加賀君にしたら、嬉しそうにしていたからね。そのお礼じゃないかな？ ……もしくは、それで雨宮君を怒らせて、かなり八つ当たりをされていたことも話したから、気を遣ったのかもしれない」

「そこまで強くは言ってませんよ」

弘樹と何故そんな話題になったのかも気になるけど、まずはそこを訂正しておきたい。神田の言葉はドストレートではなかったが、作業の手を止めて延々と続く生産性のない雨宮の愚痴にうんざりして、やんわりとそんな意味のことを言ったのは事実だ。

だが、莉子の言葉が雨宮の心を動かすことはなく、逆に彼のプライドをいたく傷付けてしまい、それから、今日に至るまで彼にはひたすら強く当たられている。

「そうなるのがわかっていても、口を挟まずにいられたのは、小日向君の正義感だ。あの場の会話を加賀君が耳にすることはなくても、君は彼の名誉のために雨宮君に意見した。そのおこないに対するご褒美と思えばいいよ」

だから遠慮なくどうぞと、莉子にチョコを受け取るよう勧め、神田は話を続ける。

「小日向君の言うとおり、加賀君は努力家だ。でも加賀設計の御曹司という立場から、その努力を無視したやつかみや、悪意に晒されることが多い。だから、ちゃんと自分の仕事を見てくれる人がいて嬉しかったんだと思うよ」

「加賀さんの仕事を評価している人は、私の他にもたくさんいると思いますよ」

「そうだけど、彼は加賀設計の御曹司だ。利害関係を見越した賞賛も山ほど受けている。もちろんそれを鵜呑みにするほど、彼は愚かじゃないけど、駆け引きのない手放しの賞賛というのはなかなか本人の耳には届かないものだよ」

だからこそ、莉子の話を彼に聞かせたのだと話す神田は、その時の光景を思い出しているのか少し寂しそうに笑う。

後進の育成に尽力する神田にとっては、弘樹もまた気にかける若手であるようだ。

——これでお菓子に対して理性を保てたら、最高の上司なのに……

そんなことを思い、そっと嘆息した莉子は、ふと先ほど気になったことを聞く。

「そういえば、どうして私のことが話題になったんですか？」

莉子の質問に、神田は大事なことを思い出したといった感じで手を叩き合わせる。

「そうそう、加賀君が小日向君の視点を褒めていたよ。神田さんのところには、柔軟な視点を持った子がいいですねって褒められて、それから君の話になったんだ。……彼も機会があれば小日向君と話したいと言っていたから、賀詞交換会では彼と色々話せ

たかい？」

「あっ！」

所長の言葉に、顔が熱くなる。

——そういったことは、もっと早く教えてほしかった。

彼が何度も自分を飲み込みに誘ってくれたのは、純粹に同業者として莉子と話をしたいと思つてのことだったのだ。

——奥さんのことを気にしなくていいって言うはずだよ。

ついでに言えば、彼の瞳の奥に雄としての情熱を感じたような気がしたのも、完全に莉子の思い込みだ。

今さらながらに、警戒心剥き出しの自分の行動が自意識過剰でしかなかったとわかり、恥ずかしくなる。

あれこれ思い出して赤面する莉子に、神田が視線で「どうだった」と問いかけてくる。「えっと……加賀さんは忙しそうで、軽くご挨拶した程度で、大したお話はできませんでした」

あの日、短い会話を交わした弘樹は、次から次へと人に話しかけられていた。

加賀設計の御曹司である彼に、誰もが敬意を払って接し、彼は威風堂々たる態度でその相手をしていた。

そんな姿を見て、さつきまで気さくに言葉を交わしていた弘樹を急に遠い存在に感じてしまい、遠目にその姿を眺めて会はずだった。

「それは残念だったね」

そう返した神田は、なにかを思い出した様子で立ち上がり、デスクの引き出しを探る。そして、一枚のチラシを持って戻ってきた。

「もし加賀君の話に興味があるなら、これに参加してみてもどうだい？」

そう言って手渡されたのは、今週末開かれる弘樹の講演会のチラシだった。美人ファッションモデルとしてテレビでも活躍する女性と弘樹の二人で、これからの男女共同参画社会における快適な暮らし方について対談形式の講演をおこなうらしい。

「これ……私が参加してもいいんですか？」

ざっと内容を確認した限り、就職活動前の学生に向けた講演会のようだ。会場も近所の大学の講堂を使用している。

「年齢制限が書かれているわけじゃないし、小日向君、若いから問題ないでしょ。興味があるならとりあえず飛び込んでみて、駄目って言われたらその時に諦めればいいんじゃない」

こともなげに返した神田は、チラリと莉子の顔を見て続ける。

「小日向君、メイクや服装で誤魔化しているけどかなり童顔だから、学生に紛れても案

外バレないと思うよ」

「……っ」

童顔というのは、莉子にとって触れてほしくない部分なのだけど、神田には見抜かれていたらしい。

だいたい社会が変わってきているとはいえ、今でも打ち合わせなどの際、若い女性というだけで軽んじられることがある。そうしたことがないように、仕事の時はシックなパンツスーツと大人びたメイクを心がけているが、素顔はどちらかといえば童顔だ。

ついでに言うと、プライベートでは年相応の可愛い感じのファッションが好きなので、私服なら違和感なく学生に紛れることは可能かもしれない。

直接話すことはできなくても、彼の話を聞く機会は貴重だ。間違いなく勉強になる。

「ありがとうございます。行ってみます」

莉子がそう言うのと神田は、それでいいと笑顔で頷いた。

これで話は終わったと腰を浮かせた神田に、莉子はいいでとばかりに尋ねる。

「そういえば所長は、加賀さんの奥さんにお会いしたことはありませんか？」

その質問に、神田は浮かしかけた腰をソファアに戻して首を横に振る。

「いや。噂で聞いたことがある程度だよ。本人はそういうプライベートなことを話さないタイプだからねえ」

そう言いながら、神田が教えてくれたのは、これまで莉子が耳にしたことのある噂と似たような内容だった。

奥さんとはイギリス留学中に会い、そのまま愛を育んだらしいこと。

相手も自国で建築関係の仕事をしていて国を離れることができないが、弘樹も加賀設計の後継者として日本を離れられない。

そのため、仕方なく別居生活を送っているのだとか。

または、弘樹の祖父である加賀設計の現社長が、この結婚を快く思っていないため、入籍できないのだとか噂は色々あるらしい。

——だから、私が奥さんについて質問した時、加賀さんの反応が微妙だったのかな？

「まあ、どれも噂の域を出ない話だから、真相は加賀君に聞かないとわからないけど」
自分が耳にしたことのある噂話を教えてくれた神田は、最後にそう言って話を締めくくる。

賀詞交換会の日、見目麗しい女性が『加賀さんを食事に誘ったのに、さりげなく指輪を見せられて、断られた』と嘆いていた。

嘆いているのはなにもその女性一人に限ったことではなく、多くの女性が、妻がいることを理由に誘いを断られているようだった。

神田によると同業者の間でも、彼の愛妻家ぶりは有名らしく、浮いた噂を聞かないの

だとか。

ということとは本人に確認するまでもなく、弘樹にパートナーがいるのは確かだ。そんな彼が二度も自分を誘ってきた理由は、やっぱり仕事の話がしたかったからなのだと、ようやく莉子は納得する。

やっぱり彼に雄の顔を感じたのは莉子の勘違いだったのだ。……そもそも、愛妻家の彼に、そんな印象を持つこと自体おこがましい。

「どんなことでも、チャンスに恵まれた時は、とりあえずチャレンジしてみることだよ」
神田が言っているのは、もちろん講演会のことだ。

でも先日のことを思い出していた莉子は、変に身構えたことで、損をしたねと言われた気分になる。

「これからはそうします」

もしも、もう一度そんな機会があったなら、今度こそそのチャンスを掴んで、是非とも彼から色々学ばせてもらおうと決意する。

莉子は一礼して立ち上がると、所長室を後にした。

2 誘惑は蜜の味

週末、弘樹は親会社である加賀設計を通して依頼された講演会のため、都内の大学を訪れていた。

「加賀さん、どうかされましたか？」

講演の対談相手であるファイナンシャルプランナーの女性が、怪訝な表情で声をかけてきた。

大学のカフェコーナーで進行の最終確認をしている途中で、ふと頭を上げた弘樹がそのまま動きを止めたのが気になったらしい。

弘樹は、小さな丸テーブルを挟んで向かい合う女性に視線を戻して笑みを零す。

「あ、いや……」

今日の講演会は学生が対象なので、ここに彼女がいるはずない。

それなのに会場に向かう人の流れの中に、神田デザインの小日向莉子の姿を見た気がしたのはどうしたことか。

——飲みに誘って断られたことが、意外にショックだったのか？

思春期の少年でもあるまいし、いい年をした男がそれくらいのことでは傷付くわけがない。なのに、そんなふうに思う自分について笑ってしまう。

「なんだか、楽しそうですね」

そう言って微笑む女性は、綺麗なネイルで彩^{いろど}られた指で、頬にかかる髪を耳にかける。そのまま目遣いでこちらへ視線を向けてきた。

自分を誘う眼差しには気付かないフリをして、左手で顎のラインを撫でる。

さりげなく左手の指輪を見せても、相手の表情に動じる様子はない。それどころか、姿なき存在に對抗心を燃やしているのが伝わってくる。

「面白い話なら、是非私にも聞かせていただきたいわ。今日の講演会が終わったら、二人だけで打ち上げでもどうかしら？」

女性の視線には、自分の誘いが断られるはずがないという自信が見え隠れしている。

——面倒くさい……

弘樹は内心嘆息しつつ、素知らぬ顔で返す。

「すみませんが、今日はこの後、大事な約束があるので」

もちろん、まったくの嘘である。

だが、そう言って愛おしげに指輪に視線を落とせば、相手は弘樹の言う約束の相手が妻だと思うだろう。

「そう……」

「またの機会に誘ってください」

つまらなそうな顔をする女性に、社交辞令としてそう返しておく。

いつも女性からの誘いをこうして断っているので、周囲は弘樹を愛妻家だと思っているが、それは大きな誤りである。

なにせ弘樹は、内縁の妻どころか恋人もない、真正正銘の独り身なのだから。

その証拠に、鈍い光沢を放つ左手の指輪の内側にはなんの刻印もされていない。

「そろそろ会場に移動しましょうか」

そう言って席を立った弘樹は、椅子の背に添えた自分の左手に視線を落とし、これをつけるに至った記憶を探る。

自惚^{うぬぼ}れではなく、容姿端麗で加賀設計の御曹司として生まれた自分は、昔からかなり

女性にモテた。

それをいいことにそれなりに遊んでいた時期もあるが、加賀設計の後継者として、K Sデザインを任されるようになった今、無駄に華やかすぎる自分の容姿は正直煩^{わづら}わしい。特に仕事関係の女性から、仕事に絡めた誘い方をされると、心底対応に困る。

今から数年前、大学時代の先輩に飲み席でそんなことを零したところ、『独身だから、そんな面倒なことになるんだ。さっさと結婚しろ』と軽く説教されたことがあった。

既婚者であり愛妻家で知られる先輩に言わせると、そうした男と女の駆け引きの煩わしさなど、結婚すれば『妻に悪いので』の一言で片付けられるのだという。

正直に言えば、これまでの男女関係における弘樹の認識は、深入りすることなくその

場限りの戯れを楽しむもので、恋愛や結婚など真剣に考えたことはなかった。なにより加賀設計の後継者として、学ぶべきことがたくさんある中、恋愛などに時間を費やしている余裕はない。

とはいえ先輩の言葉に思うところもあり、友人の結婚式に出席する際、試しに結婚指輪に見える指輪を左手の薬指に嵌めて出席してみたところ効果は観面^{てきめん}だった。

誘ってくる女性が格段に減った上に、声をかけてくる女性も、特別な相手がいるように振る舞うと、それ以上しつこくしてくることはなかった。

それに気をよくして指輪をつけ続けた結果、いつの間にか自分は、既婚者で愛妻家ということになっていた。

放っておいたら噂はどこまでも一人歩きをして、最近では、仕事第一主義の弘樹がそこまで惚れ込む女性はいきつと同業者に違いはないとか、出合いはイギリス留学中だとか、妙にリアルなディテールが付け加えられているらしい。

そのたくましい想像力には笑うしかないが、自分にとってはメリットの方が大きかったので、噂を否定はしなかった。

そしてそのまま、愛妻家の既婚者として振る舞っている。自分の結婚話など寝耳に水だった家族たち、とりわけ祖父の加賀秀幸^{ひでゆき}にはかなり渋い顔をされているが知ったことではない。

講堂へ向かいながら過去を振り返っていた弘樹は、ふと一人の女性の顔を思い出す。

——小日向莉子。

若い頃から尊敬していた神田の下で働く彼女の存在は、神田デザインの手掛けるデザインに変化が生まれたことでなんとなく意識するようになった。

柔らかい色使いと、曲線をうまく活かしたデザインを得意とする才能ある若手がどんな人なのかと興味を持った。

関心があれば突き詰める性分の弘樹は、神田にあれこれ質問して、彼女の人の柄を知ったことで、より一層小日向莉子という存在を知りたくなった。

コンペ会場でその姿を探すだけでなく、適当な理由をつけて神田デザインが担当している現場を覗きに行ったこともある。

遠目に見る彼女はいつも動きやすいパンツスーツで、キビキビと動き回っていた。アクセサリーはつけず、メイクに媚びたところのない彼女を、可愛げがないと言っている人もいるようだが、弘樹の目には、周囲を警戒して毛を逆立てる猫のように映った。常に神経を失らせているその姿に、いつか壊れてしまうのではないかと心配になった。

神田の下にいれば、彼がうまくフォローしてくれるだろう。それでもつい気になって、偶然、現地視察で遭遇した彼女を飲みについたのだが、指輪が邪魔をして逃げられてしまった。

それでも未練がましく、彼女を駅まで送る道すがら言葉を交わしたことで、彼女への興味が一気に増した。

月灯りの下、軽やかな足取りで身を翻した彼女は、自分のことを普通の人だと言ってくれた。

加賀設計の御曹司として常に特別扱いされ、周囲から距離を取られるか、媚びへつらわれることに慣れていた弘樹にとって、それは新鮮な驚きだった。

しかも彼女は、自分に向かって『それなら、努力すれば私も、いつか加賀さんに追いつけることですよね』と、微笑みかけてくれた。

これまで、なんらかの恩恵を求めて近付いてくる女性は多く見てきたが、彼女のように見返りを求めることなく、努力して自分を追いかけると言ってくれた女性は初めてだった。

だから性懲りもなく、再度誘ってみたのだが、あえなく玉砕した。

「……」

あっさり断られたのは残念だが、あたふたした表情で自分の誘いを断る莉子の姿を思い出し、弘樹はクスリと笑う。

指輪をつけているのを煩わしく思ったのは、これが初めてだ。

面倒を避けるために同業者の前では既婚者のフリを続けてきたのに、気付けば彼女に

「妻の存在は、気にしなくていい」とまで言ってしまった。自分でも不思議ではあるが、気になるのだから仕方ない。

興味を持ったことに自分はかなりしつこい性格をしているので、またタイミングを見て彼女との距離を詰めるとしよう。

加賀設計の後継者として、同業者との面倒は極力避けるつもりでいるが、それは自分の欲求を抑えてまで守るものではない。

次はどうやって彼女を誘おうかと考えながら、弘樹は思考を仕事モードに切り替えていくのだった。



弘樹の講演会に参加した日の夜、莉子はおっかなびっくりといった感じで、老舗ホテルのラウンジの前に立っていた。

弘樹の講演会は大変勉強になった。

感動したといってもいいくらいの刺激を貰った莉子は、講演会終了後、そのまま帰ってしまいう気にならなくて、講演会で彼が話題に挙げていた建築物を数軒回ってみたのだ。

その中には、以前から知っていた建物も含まれていたけど、彼の所見を踏まえて観察

すると、違う発見があった。

「そうやってあちこち見て回っていると、講演を聴いた直後の興奮は、冷めるどころか増していくばかりだ。」

湧き上がる高揚感に背中を押されて、以前彼に誘われたホテルのバーの前まで来てしまったわけだが、いざ店の前に立つと、その格式の高さに腰が引けてしまう。

しかも今日の自分は、学生対象の講演会に紛れ込むため、丈の短い白のセーターにすみブルーのプリーツスカートを合わせて、明るい色のメイクをしていた。

仕事中は低い位置で一纏めにしている髪も、今日は下ろして毛先をカールさせている。若作りとまではいかないけど、見るからに大人の社交場といった趣のバーに適した装いとは思えない。

「……やっぱり、今度にしよう」

着ているセーターの裾を引っばつて、自分の姿を確認した莉子は、ドアを開ける勇気が持てずを返す。

その瞬間、誰かとぶつかりそうになった。

いつの間にか、莉子の背後に立っていたらしい。

振り向くと視界いっぱい、洒落たネクタイを締めた男性の胸元が飛び込んできて、相手の背の高さに驚く。

立ち読みサンプル はここまで

「すみませ……ッ！」

目の前で突然振り返ってしまったことを詫びて、相手を見上げた莉子は、そこで息を呑んだ。

どうして彼がここに……そんな思いで目をパチクリさせる。そんな莉子を見下ろす弘樹も、驚いた顔をしていた。

「か……加賀さ……」

莉子は戸惑うあまり、うまく言葉を発することができない。弘樹は一度視線を巡らせながら、微かに首をかしげて聞いてきた。

「もしかして、俺の講演会に来てた？」

「——っ！」

言い当てられて、グツと息を呑む。

後ろの方で隠れるようにして聞いていたのに、どうして気付かれたのかわからない。

——学生に紛れてなにをしているのだと呆れられたかも……

莉子は恥ずかしさから視線を落として小さく頷く。

「……はい。ごめんなさい」

気まずさから謝罪の言葉を口にする莉子の髪に、弘樹の優しい吐息が触れる。

「ここで君に会えるとは思わなかったよ」